

北の庄城(北庄城)(指定無)(福井市中央1丁目)(柴田公園, 北の庄城址資料館)

北の庄城址(きたのしょうじょうし)・柴田公園は、柴田勝家(1523?~1583)が築造した北庄城の一部が考古学的発掘により初めて検出された遺構の上にあります。徳川期に結城秀康(1574~1607)がその遺構を大胆に改変し福井城を造営していった様子も地層の切り合いの中で確認することができます。

その後、藩政時代はもとより、明治維新後から戦後・現代に至るまで、この場所は福井の都市的中心部として発達してきました。その意味で北の庄城址・柴田公園は、県都福井市の発生期を偲び、その後の発展の歴史的形成過程を物語るかけがえのない史跡であるといえます。

さらに幾度か被災しながらもその度に甦り、近年公園と隣接する地に、あたかもこれを護持するかのようになり柴田神社が再建整備され、勝家公およびお市の方が合祀されています。このことによって柴田神社は氏子のみならず、全国の勝家・お市の方ファンがお詣りに訪れる神社となっているのです。

園内には、勝家公、お市の方、三姉妹の銅像が建てられているほかに、勝家公の子孫であるとされる日本画家、平山郁夫氏揮毫による記念碑もご覧いただけます。園内の資料館では、より詳しく勝家公や北庄城について知ることができます。この公園は、平成19年に『日本の歴史公園100選』にも選ばれました。

◆発掘調査の成果◆

福井市では、柴田神社の建設工事、北の庄城址・柴田公園の整備工事を契機に、“福井城”、そして伝承されてきた“北庄城”を確認することを目的として平成5年度から6回にわたり発掘調査を実施しました。

北庄城は、これまで文献資料や伝承でのみ語られてきた城郭でありましたが、発掘調査によって初めてその存在を確認しました。確認した堀は、大規模な城郭の一部であります。吉野川(のちの百間堀)と堀を東からの防御としていた城郭の構造であったとうかがえます。また、福井城の築城によって、破壊をうけてその全貌が失われてしまっていることがわかりました。

北庄城の築城はこの地にはじめて都市を建設した事業であります。現在の福井市は北庄城を基礎とし、福井城に受け継がれて発展してきました。そのため、福井市を語る上で、その歴史的価値は大きいものがあります。

堀と石垣について

確認している堀は幅約25mで、北に向かって延びています。堀を護岸していた石垣は、本来は、何段も積まれていたことがうかがえますが、福井城を築城する際に破壊され、堀の南と西側で1番下の根石のみ残っているにすぎませんでした。堀から16世紀後半の越前焼の播(す)り鉢・甕(かめ)、陶磁器、古銭や焼けた土壁が見つかっています。

堀によって遮られる北と南の区画(曲輪(くるわ))、そしてその曲輪間をつなぐ道(土橋)を確認しました。曲輪には城内に向かう道に面して家臣団の武家屋敷が建ち並びます。

調査で確認した道は、南の曲輪から堀を渡り、互い違いの高石垣をぬけるかね折れで城内に通じています。このような構造は、南からの敵を防ぐことを目的としていることがうかがえます。南から眺めてみると、手前の高石垣に視界を遮られ、門は見えません。奥の高石垣の裏には階段が設けられていて、迎え撃つようになっています。

福井市ホームページによる

